

賀川豊彦の業績の普及の一助に

秋葉健史
Akiba Takefumi

当社エニウエイは東京都豊島区池袋で三〇年続く中小企業です。官公庁や大学研究機関様を中心に情報処理やデータベース構築ノウハウを提供しています。昨年（二〇一八年）

一月に当社で企画開発した『キリスト新聞アーカイブス 一九四六〜一九五〇』を発売したところ、それを通じて様ざまなご縁が生まれ、今回もそのご縁のひとつとして、賀川豊彦に関する当社の取り組みについて書く機会をいただくことになりました。

池袋の場末で営む中小企業と賀川の不思議な関係について書きたいと思います。

当社は特定の政治宗教イデオロギーのバックボーンを持つわけではありませんので、賀川との出会いも偶然的の積み重ねに過ぎませんでした。キリスト新聞社様（以下新聞社）に印刷会社様を通じて出会ったのが一〇年前、そこから『キリスト教年鑑』というデータベースの制作協力を毎年担わせていただいています。その渦中に新聞社創業者の一人として初めて賀川の名前を知りました。その後、

新聞社創立七〇周年を目前にした二〇一四年頃から、当社の提案で保存を目的としたキリスト新聞バックナンバーの電子化事業を開始しました。限られた予算の中で少しずつ進めていく状態が続きました。

ある時、ふと眺めていた「キリスト新聞」の中にハンセン病関係の記事を見つけました。従来から当社は国立ハンセン病資料館様と取引があり、ハンセン病関連新聞雑誌記事のデータベース構築を担っていました。早速、記事紹介について新聞社に許諾を取ったうえで、該当記事をハンセン病資料館に持ち込みました。

記事収集を担当されている図書室福富様に、その記事の希少性を認めていただき、すぐに「キリスト新聞七〇年分におけるハンセン病関連記事の抽出とデータベース化」事業が始まりました。この事業はもうすぐ完結を迎えますが、一〇〇〇件を超える関連記事が見つかり、キリスト教とハンセン病の戦後の歩みを知ることができる重要な記録保存とな

ったと自負しています。

当社は、その事業で生まれた収益を原資として、「キリスト新聞アーカイブス」を企画構想しました。そして独自に投資を重ねながら、キリスト新聞のデータベース構築と検索アプリケーションの設計開発を一年かけて行い、今回の発売にこぎ着けることができました。

制作過程において、賀川本人の執筆記事などを読む機会が増え、その業績と思想への知見を深めていきました。新聞は週刊でしたので、まとまった冊子上の論考と違い、日常の中で毎週生み落とされていく活きいきとした賀川の言葉に触れることができました。

わたしは賀川の数多の業績と思想の中で、特に「協同組合七つの理念」に感動しました。なぜなら、当社が三〇年存続し得た源泉となる企業文化と経営思想に近いものがあつたからです。その時空を超えた共感と感動が、賀川の業績を網羅俯瞰し、今後の社会構想研究のヒントになるツールを創ることができないかという次の発想に結び付いていきます。

× × ×

賀川による協同組合理念と実践が、現在の行き詰まる資本主義経済と、展望を描ききれ

キリスト新聞アーカイブス

GHQ占領下の創刊から占領解除後の時代へ

1946年4月26日、賀川豊彦主導のもとキリスト新聞第1号が創刊。GHQによる出版物の検閲や物資不足など戦後の混乱期に発行され、以後72年に渡ってキリスト教界の専門紙として続いている。

キリスト教というフィルターを通して、当時の世相や人々の生活実態が紙面から鮮やかに伝わってくる。戦後占領期から占領解除後の復興に向けた熱い息吹を伝える貴重な資料を初めて電子化。

[掲載データ] 創刊号(1946年)～223号(1950年)

ない唯物論的社會主義經濟を超える中道、あるいは新たな道を模索するヒントになるのではないかと、自身の経営経験と併せて強く感じました。

とはいえ当社は民間企業です。遠くの理想（ビジョン）と目の前の現実（お金）を両立させなければ生きていきません。賀川思想への共感と感動、そこから生まれた次の仕事の発想を、具体的にどう現実（お金）と取り結びながら進めていけるのか、構想を周囲に話しながら模索していました。

その折、世田谷区にある賀川豊彦記念松沢資料館副館長の杉浦様からご連絡をいただきました。購入いただいた「キリスト新聞アーカイブス」を使ってみて、そのデータの細やかさやアプリケーションの使いやすさを評価いただき、同じノウハウで賀川豊彦オンライン資料集（データベース）を一緒に作りたいとのご要望でした。

青天の霹靂とはまさにこのことで、すぐに松沢資料館を訪問し話を伺いました。賀川を研究対象に選ぶ若い研究者が増加していること、一方まとまった研究素材を提供するツールがないことをお聞きしました。思いを共有し、すぐに企画構想の具体化に着手し、二〇一九年度から早速事業（予算）化するものになりました。現在、杉浦様と後世の研究者に役立つデータベースの在り方を検討し、資料や文献の調査を行っている最中です。

当社は賀川が二〇世紀に残した数多の業績に敬意を表し、数年かけてこの事業に丁寧に取り組む所存です。この事業が、未曾有の少子高齢化低成長社會を生き抜くヒントのひとつを提供するものとして、幅広く活用されるものになることを目指します。

当社と賀川に纏わる不思議な経緯を書いて

きました。すべてが順風満帆というわけでは当然ありませんでしたが、何かに導かれるように進んできたこれまでの経緯が、当社に使命感を与えていることは確かです。競争、ノルマ、隠蔽、各種ハラスメントが横行し、余裕と希望を持って働くことが難しくなっているのが日本社會の現状と認識しています。多くの会社は、黄昏時を迎えている進歩史観ベースの考え方から脱することが出来ず、それでも未来だけに可能性を見出そうとしているように見受けられます。

当社は今後も賀川を始め、当社が関わるすべての分野、またこれから関わりたいと思っている分野や人物事象において、徹底的に過去と向き合い、過去を再活性化することの効用を考え続けたいと思っています。

過去に徹底的に向き合うことで未来が見える、そういう指向性の民間企業が池袋の場末に一社ぐらいあってもいい、当社はそう考えています。

当社は民主的運営を心掛けており、この小文も全社員で事前に合意したうえで作成しています。

（あきば・たけふみ／エニウェイ代表）